新見公立大学紀要　第31巻
pp. 1-7, 2010

原　著

成人看護学における「成人看護学演習」の授業評価に関する研究

小野　晴子*・逸見　英枝・中山　亜弓・金山　弘代・掛屋　純子・柘野　浩子

成人看護学

（2010年11月17日受理）

本研究は,「成人看護学演習」の授業実践についての学生による授業評価を行ない，本授業の改善を要する点を明らかにし今後の教授活動や教材の研究の手がかりを得るものである。

Ａ短期大学の「成人看護学演習」は，成人期の患者の有するさまざまな問題について考え，看護の広がりと問題解決のプロセスを具体的に学習することを目標としている。学生は，主体的に事例の情報を把握し，援助の優先順位を考え，計画を立案していく。その学びが臨地実習において看護過程の展開に役立つことをねらいとしている。

研究方法は，Ａ短期大学看護学科２年生に上記の授業終了後に質問紙調査を実施した。その結果,「成人看護学演習」の達成度は高かった。評価が高かったのは「演習の参加度」と「学生の知識・理解」の深まりであった。低かった評価は「学生の感情への共感」で，中でも『意見や考えを聞いて実習の不安がなくなった』が最も低く，実習に対する不安の強さを示していることがわかった。これらのことは,「成人看護学演習」の授業の継続と実習への不安の軽減に向けた授業改善に取り組む必要性を示唆している。

（キーワード）成人看護学演習，授業評価，臨地実習，看護過程の展開

はじめに

成人看護学演習は，１単位（15時間）を成人看護学の教員によるゼミ形式で授業展開を実施して10数年が経過した。成人期の患者の有するさまざまな問題について考え，看護の広がりと問題解決のプロセスを具体的に学習することを目標としてきた。その事例毎に限られた情報を把握し，援助の優先順位を考え，計画を立案していく。成人期にある患者の看護過程展開に関する１～２事例の授業報告はいくつかあるが，その教材として10事例を用いて全体で共有する授業評価に関する先行研究は見あたらなかった[1)2)]。

この授業の独創性は，成人看護学の代表的な疾患，重要な症状を選び，10事例を提示していることである。そこで，臨地実習における看護過程の展開に役立てられるよう「成人看護学演習」で何をどのように共有したかを評価・分析し，授業改善や教材研究の手がかりとしたいと考えた。

Ⅰ．研究目的

「成人看護学演習」の授業実践に対して学生による授業評価を行ない，本授業の改善を要する点を明らかにし，今後の教授活動や教材の研究の手がかりを得る。

Ⅱ．研究概要

１．研究の背景と目的

成人看護学演習（以後，演習と略す）は，２年次後期の終盤で専門科目を殆ど終了した時期の領域実習開始前に知識の統合の仕方などを学習できるように配置している。事例は，成人看護学の代表的な疾患，重要な症状を選び作成する。全部で10事例を１グループ１事例で取り組む。学生たちは限られた情報を分析し，関連図を作成することで患者の全体像を把握し，援助の優先順位を考え看護計画を立案している。その学びを共有することで，臨地実習において患者の看護実践に役立てられるよう２年次の後期に「演習」の授業を実施している。演習を通して，学生は患者の有するさまざまな問題について考え，看護の広がりと問題解決思考を養い，その学びを共有することで臨地実習の取り組みが容易となると考え授業を展開している。そこで，授業評価をおこない，分析することで教授活動や教材の研究の手がかりを得たいと考えた。

２．授業科目の目的

成人期の患者の有する様々な問題について考え，看護の広がりと問題解決のプロセスを具体的に学習する。

*連絡先：小野晴子　看護学科　新見公立大学　718-8585　新見市西方1263-2

３．平成21年度成人看護学演習の授業計画と講義内容

回	講義内容
１回	オリエンテーション・グループ編成
２回	事例検討ゼミ
３回	〃
４回	〃
５回	〃
６回～８回	事例検討発表会

４．平成21年度成人看護学演習の障害別事例とグループ編成

G	障　害　別	事　　例	学生数
1	呼吸障害	肺切除を受ける患者の看護（術前・術後）	６名
2	循環障害	急性心筋梗塞患者の看護 ― 心不全を合併した患者の看護 ―	７名
3	腎障害	慢性腎不全患者の看護 ― 透析療法導入期の看護 ―	７名
4	意識障害	脳梗塞患者の看護	６名
5	生活行動障害	大腿骨頚部骨折の患者の看護（回復期）	６名
6	消化吸収障害	人工肛門造設術を受ける患者の看護（術前・術後）	７名
7	消化吸収障害	肝硬変症患者の看護	６名
8	内分泌・代謝障害	糖尿病患者の看護	６名
9	免疫力・出血傾向	白血病患者の看護	６名
10	女性生殖障害	乳がん患者の看護（術前・術後）	６名

事例を10事例にしたのは，１グループの人数が６～７名にすると10グループの編成になったこと，成人看護学を担当する教員５名が２事例を作成し担当するためである。尚，グループの編成に当たっては，意図的な振り分けを避け，学籍番号順に編成を行なった。また，年度によって変えることはなく，基本的には同じような分け方をしている。

５．成人看護学演習で使用する記録用紙

1)実習記録Ⅰ（Ⅰ号紙）：情報シート・関連図を記載

2)実習記録Ⅱ（Ⅱ号紙）：重要な情報，分析統合，看護診断，目標，計画，結果・評価修正まで記載する。演習では実習記録ⅠとⅡの計画までを目標としている。

Ⅲ．研究方法

１．調査対象：演習の授業を受講したＡ短期大学看護学科２年生60名，回収率93.4％

２．調査時期：平成21年12月22日～平成22年２月23日（授業展開）
平成22年２月24日～平成22年３月９日（調査期間）

３．調査方法：アンケート調査

４．調査内容：１)演習の達成度，２)舟島[3)]らの尺度を参考に研究者間で質問項目を設定した。その内容は，演習に関する自己評価①学生の知識・理解，②学生の感情への共感，③演習の参加度，④演習の効果を４項目20問設定し自己評価を求めた。３)演習に関する意見・感想を自由記述で求めた。

５．分析方法：リカート法の５段階間隔尺度を用い，「非常に当てはまる」５点，「かなり当てはまる」４点，「大体当てはまる」３点，「あまり当てはまらない」２点，「全く当てはまらない」１点とした。また，演習に関する自己評価は，その割合で示した。各項目の内容を５つの観点からみた評価は以下のとおりであった。今回は「非常に当てはまる」「かなり当てはまる」を「当てはまる」として分析をおこなった。（『』は質問内容）

分析は，統計ソフトSPSS 16.0Jfor Windowsで行なった。自由記述については内容分析を行なった。

６．倫理的配慮：Ａ短期大学看護学科２年生全員に本調査の主旨を説明し，研究目的以外には使用しないこと，匿名性の保持，自由意志による参加であること，成績とは無関係であること，公表の旨等を口頭及び文書で説明し，回答をもって同意が得られたとした。また，Ａ短期大学研究倫理委員会の承認を得た。

Ⅳ．結果

１．演習の取り組みと達成度

演習への取り組みの自己評価は，平均3.5点（以後点は略）であった。割合でみると「非常に当てはまる」が15.3％,「かなり当てはまる」が35.6％で,「大体当てはまる」が39％を占め，平均は3.5，得点を割合でみると89.9％が演習に取り組んだと答えた。

演習目標の達成度は，平均で3.5であった。割合でみると「非常に当てはまる」が3.4％,「かなり当てはまる」が49.2％で,「大体当てはまる」が44.1％を占め，合わせて96.7％が「達成できた」と答えた（図１）。

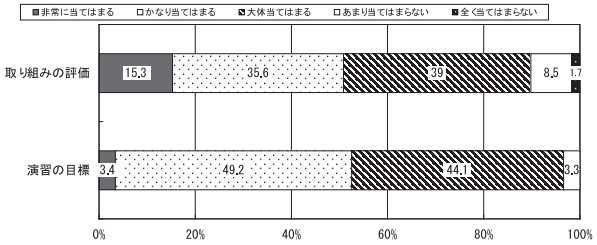

図１　演習の取り組み・達成度　（ｎ＝59）

２．演習に関する授業評価

授業評価の４項目を比較すると，最も評価の高かった項目は「演習への参加度」で4.4であった。次いで「学生の知識・理解」の4.2,「演習の効果」3.8,「学生の感情への共感」3.5と続いていた。４項目の平均をみると，4.0であった（図２）。

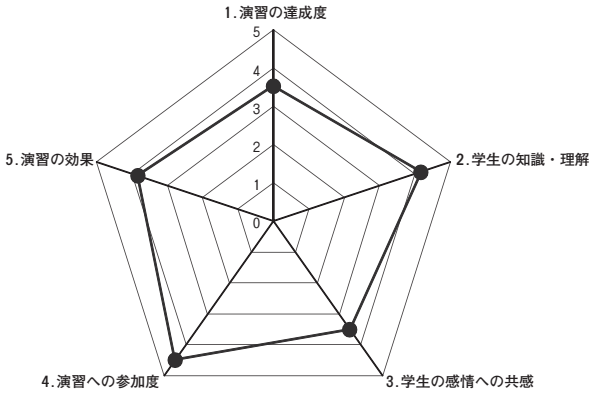

図２　成人看護学演習の授業評価　（ｎ＝60）

１）演習への参加度

参加度で最も評価の高かった内容は，『発言に耳を傾ける』が93.4％で『発言者の話を真摯に聞く』が91.7％，次いで『毎回参加した』が90.0％。『自分の振り返り』が78.3％，『発言の積極性』が63.3％であった（図３）。

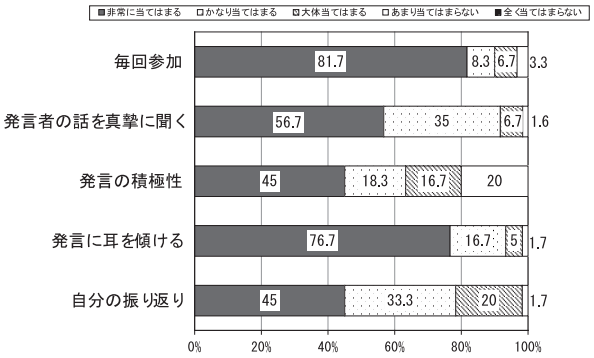

図３　演習への参加度　（ｎ＝60）

２）学生の知識・理解

知識・理解で最も評価の高かった内容は『知識・理解の深まり』と『さまざまな対象の看護の広がり』が85.0％で同率であった。次いで『情報分析の理解』が76.6％,『Ⅱ号紙の書き方を理解』71.7％,『関連図の書き方を理解』71.6％であった（図４）。

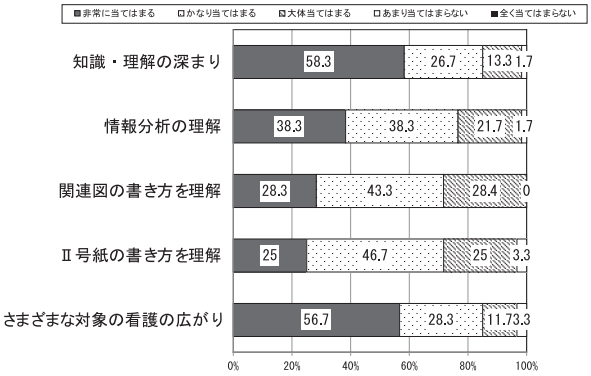

図４　学生の知識・理解　（ｎ＝60）

３）演習の効果

演習の効果の内容では『演習の必要性』が88.3％で最も高い評価だった。次いで『臨地実習がやりやすい』が66.7％,『自分の課題の明確化』が63.3％,『臨地実習のイメージ化』61.6％と『臨地実習に臨む姿勢』が53.4％であった（図５）。

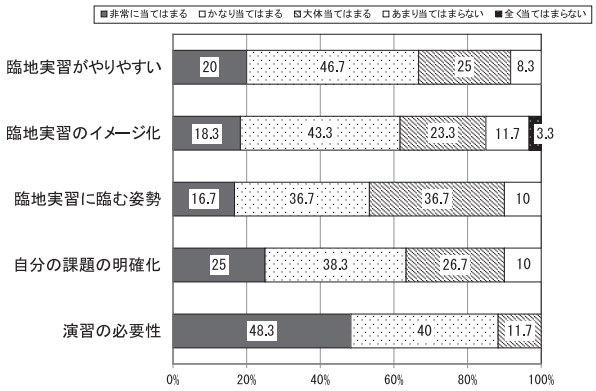

図５　演習の効果　　（ｎ＝60）

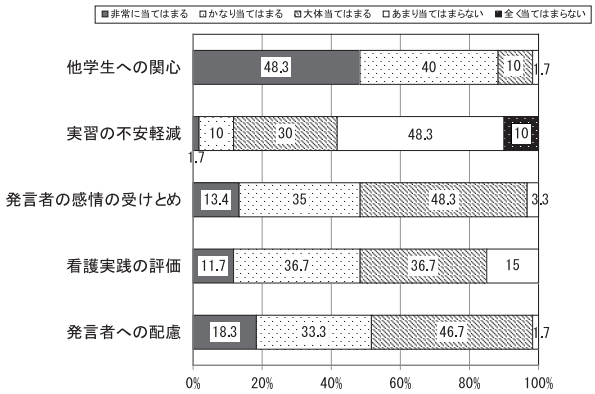

図６　学生の感情への共感　　（ｎ＝60）

４）学生の感情への共感

感情への共感の内容では『他学生への関心』が88.3%で最も高い評価だった。次いで『発言者への配慮』が51.6%，『発言者の感情の受とめ』と『看護実践の評価』が48.4%で同率であった。『実習の不安軽減』が11.7%で全項目の内容中最も低い評価であった（図６）。

３．演習に関する意見の分析

Ａ短期大学２年生60名のうち演習に関する記述のあった学生は37名で，有効回答率は61.7%であった。記述された「成人看護学演習に関する意見・感想」を分析した結果，66コードを抽出した。それを12項目のサブカテゴリーに分類し，さらに，７カテゴリーに類型化した（表１）。

コードは，＜　＞，サブカテゴリーを《　》，カテゴリーを【　】と表記する。

カテゴリーの内容は，【教材の評価】【他者の考えは知識を拡大】【看護過程の理解】【発表会で学びの共有】【不安は消えない】【疾患の理解】【全員参加を目標】の７カテゴリーであった。演習による学生の意見・感想をコード数の多い順に分析した。

教材の評価として，演習による学生の意見で最も多かったカテゴリーは【教材の評価】とした。19コードを抽出し，《さまざまな分野の事例から視野が広がった》，《演習を今後も続けた方がよい》，《資料は実習で活用できる》の３つのサブカテゴリーが形成された。その内容を主なコードから見ると，<いろいろな事例があってとても視野が広がっ

表１　成人看護学演習に関する考えの分析　　（37名，66コード）

カテゴリー	サブカテゴリー
他者の考えは知識を拡大	他の人の意見を聞くことで知識や考えも広まった(7)
	グループワークで自分では気づかないことを学べた(9)
	教員から知識を得た(1)
看護過程の理解	関連図の書き方など勉強になった(5)
	広い分野で奥深い看護過程を学ぶことができた(5)
発表会で学びの共有	質疑応答が盛んで学びの共有になった(6)
疾患の理解	疾患の理解が深まった(5)
全員参加を目標	参加しない人がいた(3)
教材の評価	さまざまな分野の事例から視野が広がった(9)
	演習を今後も続けたほうがよい(8)
	資料は実習で活用できる(2)
不安は消えない	不安は消えない(6)

た>，<実習に向けて演習は絶対必要になると思う>，<プリントや関連図が実習で使えると思った>などの意見であった。

他者の考えから学ぶについてのカテゴリーは,【他者の考えは知識を拡大】とした。17コードを抽出し,《他の人の意見を聞くことで知識や考えも広まった》,《グループワークで自分では気づかないことを学べた》,《教員から知識を得た》の３つのサブカテゴリーが形成された。その主なコードを見ると，<他者の考えを聞いて自分と違う考え方があることを知った>, <他の人の意見を聞くことで知識や考えも広まった>，<前向きに頑張ろうという意欲につながった>, <グループワークで学生同士が積極的に話し合って進めていくことで学びが深まった>などと述べていた。

看護過程についてのカテゴリーは【看護過程の理解】とした。10コードを抽出し,《関連図の書き方など勉強になった》,《広い分野で奥深い看護過程を学ぶことができた》の２つのサブカテゴリーが形成された。主なコードを見ると，<関連図のつながりなどに目を向けて関心を持つことができた>, <他の人の看護過程を皆で考えいろいろな視点で見ることができた>などの意見であった。

発表会で得た学びについてのカテゴリーは【発表会で学びの共有】とした。６コードを抽出し,《質疑応答が盛んで学びの共有になった》の１つのサブカテゴリーが形成された。その主なコードを見ると，<意見交換が活発だったのでとても楽しかった>，<発表によって学びの共有になった>などと述べていた。

臨地実習への不安についてのカテゴリーは【不安は消えない】であった。６コードを抽出し,《不安は消えない》の１つのサブカテゴリーが形成された。その主なコードを見ると，<実習に向けての不安はあまり消えない>や<今回の演習で実習記録の不安が少し軽減した>などの意見であった。

疾患の理解に関するカテゴリーは【疾患の理解】とした。５コードを抽出し,《疾患の理解が深まった》の１つのサブカテゴリーが形成された。その主なコードを見ると，<いろいろな疾患について学ぶことができた>や<さまざまな疾患のパターンがあって楽しい演習であった>などの意見であった。

演習の授業への参加に関するカテゴリーは【全員参加を目標】とした。３コードを抽出し,《参加しない人がいた》の１つのサブカテゴリーが形成された。その主なコードを見ると, <全員を参加させるような工夫をしたほうがよい>などの意見であった。

Ⅴ．考察

１．演習の取り組みと達成度

演習の取り組みをみると約９割と高い自己評価であった。達成度でもそれ以上目標を達成できたと高い評価を得ている。このような結果になるには，学生自身の取り組みや他の学生からの刺激を得たことによるものと考える。演習に関する学生の意見・感想に<グループワークは大変だけど, とても学びになった>や<グループワークは個人が成長するためにも良い経験になった>と述べていることからも学生が主体的にグループダイナミクスを発揮し臨んだと考える。

学生は，この演習の授業の２ヶ月後には長期の臨地実習に臨む。成人看護学実習では必ず１人～２人の患者を受け持ち，看護過程を展開して患者に沿った援助を実践する。その時に，必要不可欠な学習が演習だと考えている。演習の目的は「患者の有するさまざまな問題について考え，看護の広がりと問題解決のプロセスを学ぶ」ことをねらいとしており，その学びを共有することで臨地実習の取り組みが容易となると考える。演習は，臨地実習が目前に迫った授業科目として位置づけ，臨地実習に臨む学生の準備状況に一致していると言える。学生が<演習がなければ実習が困難になる>，<実習に向けて演習は絶対必要>と述べていることや高い演習への参加度から見ても積極的に取り組んだ結果だと考える。

２．演習に関する自己評価

１）演習への参加度

『発言に耳を傾けた』と『発言者の話を真摯に聞く』,『毎回参加した』が９割を超える高い評価であった。参加度については小野[4)]らの成人看護学実習における合同カンファレンスと同様に高い評価であった。参加度が高い評価となったのは，演習の授業が成人期の患者に起こりやすい主な疾患を障害別に提示した事例の情報分析，関連図の作成，患者の全体像の把握，援助の優先順位を考え看護計画を立案などによる。この一連のプロセスをグループ毎に展開する。この過程で学生は<疾患の理解が深まった>や<関連図の書き方が勉強になった>と述べているようにこの授業に参加することで，疾患の理解や関連図の書き方を再認識することができ，看護過程の理解につながる場であることが学生の参加度を高めたと考える。

２）学生の知識・理解

知識・理解で最も評価の高かったのは『知識・理解の深まり』と『さまざまな対象の看護の広がり』が85％の高い評価となっている。学生の意見にも<知らない疾患からの看護過程は確実に実習の予備知識になった>と述べている。また，情報の分析，関連図の書き方，Ⅱ号紙の書き方がわかったなど看護過程に関する知識・理解が深ったと考える。学生は<他の人の意見を聞くことで知識や考えも広まった>や<疑問に思うことを自分で調べていくことで理解が深まる>と述べているように，他者から聞いて，自分の意見を述べて，自ら調べるという効果的な学び方から看護過程の知識・理解が高い評価になったと考える。

３）演習の効果

演習の効果では『演習の必要性』が88％で高い評価であった。学生にとって臨床現場は未知の実践現場であり，何

が起きているのか想像できない。経験のない学生同士がグループダイナミクスで視野を広げたとしても限界がある。学生も<全体像がよく見えず難しかった>や<情報がもう少しあった方がアセスメントしやすいしイメージも湧く>と述べている。演習の効果を実感しながらも未知の臨地実習に対する不安な思いが交錯していることが伺える。授業者として，<いろいろな事例があってとても視野が広がった>という意見がある一方，全体像の把握ができる情報として<重要な問題に必要なCRP値やWBCなどの情報が欲しかった>とあるようにアセスメントにつながる事例作成の工夫が必要であると考える。予測可能なリスクを考え，さらに不足データは何かを思考できるためには，何をどこまで情報を提供するかを検討する必要がある。また，真部[5]らのように学生が作成した事例を用いることも一案だと考える。

4）学生の感情への共感

中山[6]は，感情への共感についての質問の意図を下位尺度Vとし「実習カンファレンスにおいて学生が表出した感情を受け入れ，共感するという行動の質を問うた」と述べている。今回の演習のグループワークでも中山らの意図を参考にして質問した。その結果，感情への共感では『他学生への関心』が8割を超えた高い評価だった。『発言者への配慮』や『発言者の感情の受とめ』『看護実践の評価』『実習への不安の軽減』は5割以下であった。特に『実習への不安の軽減』が全項目中極めて低く，2割弱の評価であった。これは小野[7]らの結果と同様であった。学生の意見・感想にもあるように<他の人の意見を聞くことで知識や考えが広がった>に対して<グループワーク内で役割分担を決めておけばよかった>，<グループメンバーとして責任を持って欲しかった>と述べている。グループワークの中で「聞く」という受動的な面では評価が高い，発言者に対してどのような「メンバーシップがとれたか」など能動的な側面は評価が低いと言えるのではないだろうか。

『実習への不安がなくなった』については，ロロ・メイ[8]が「不安とは漠然としたつかみどころのないものであり，脅威や恐怖を抱かせる」と定義している。学生も<実習に向けての不安は消えない>や<わからないことも多く実習に向けての不安が強い>と述べている。さらに<成人の実習はこわいと思った>と感じている。不安を軽減するためには，漠然としている不安をできるだけ具現化していくことだと考える。臨地実習の何が不安なのか，看護過程の展開ができるだろうか，初めて行く実習施設に対する不安なのか，実習指導者・看護スタッフとの人間関係なのか，受け持ち患者が自分を受け入れてくれるだろうか，グループメンバーと協力していけるだろうか，など不安の要素は多様で多岐にわたって考えられる。その一つ一つをできるだけ具体的にしていく中で，ある程度不安の内容が明確になってくる。何が不安なのかがわかれば，その対策を考えていけば不安の軽減につながるのではないかと考える。

3．演習に関する意見の分析

学生の意見・感想が約6割の学生から寄せられ，66コードに分類された。それをまとめると大きく，1）教材（事例）から学ぶ，2）他者から学ぶ，3）自ら学ぶに集約できた。

1）教材（事例）から学ぶ

意見の多かったカテゴリーは，演習の授業方法に関するものであった。コードを見ると，事例からの学びと事例の提示への要望に関するものであった。学びについては<さまざまな事例を考えることができた>や<例題が多くて視野が広がった>と述べている。要望に関しては<事例がもっと詳しいとわかりやすい>や<事例に検査値など重要な情報が欲しかった>などであった。また，資料に関しても<実習で活用できる内容にして欲しかった>や<プリントや関連図が実習で使える>など臨地実習で活用したいというものであった。

演習に関する意見が多かったのはそれだけ関心が高かったことと，学生のニーズが授業の内容と一致していたからではないかと考える。事例の提示に関しても，代表的な疾患，重要な症状を盛り込んだペーパーシュミレーションを作成し10事例を提示している。臨地実習でこの事例全てを経験できるとはいえないだけに，学生の知りたい思いから学びにつながったのではないかと考える。

2）他者から学ぶ

他者からの学びの多かったのは，グループメンバーからの学びであった。コードをみると<学生同士が積極的に話し合って進めていき学びが深まった>や<自分一人だけでは気づかない部分もグループだとより深められた>と述べていた。他者とは，グループメンバーや全体発表会でのメンバー，担当教員である。これらの他者によるグループワークが効果的に展開すれば，グループダイナミクスが発揮でき，大きな学ぶ力になると考える。これに関するコードをみると<前向きに頑張ろうという意欲につながったと思う>や<周囲のやる気に触発された>と述べ，他者の考えを聞くことにより知識が拡大できていることがわかった。

3）自ら学ぶ

演習の進め方として，学生は次の授業までに各自で事例の情報を把握し，情報を分析し，関連図を作成する。さらに援助の優先順位を考え計画を立案し，その資料を持ち寄りグループ全員で事例を展開する。このように，先ず個人学習が先行するので，そのプロセスにおいて他者との共通点や相違点を共有して自ら学びを深めたと考える。その学びのコードに<皆で疾患について看護過程を展開して学びを深められる>や<疑問に思ったことは，自分で調べていくことで理解が深まる>と述べていることからも看護の広がりと問題解決思考を養うことができていると考える。この授業プロセスそのものが自己へのリフレクションであり，自ら学ぶことだと考える。

以上のことから，演習は学生にとって臨地実習に向けて準備ができる授業になっていること，疾患の理解や看護過

程の理解を深めること，さらにグループダイナミクスを発揮して他者から学ぶことを通して自ら学ぶ姿勢も養われている。

今後はこれらのことを継続していくことと，授業改善として実習に向けての不安についても完全には消えないが，どんな不安なのかを具体化して少しでも軽減できるような授業改善が不可欠である。また，問題解釈のプロセスの理解を目標にアセスメント力や診断名・共同問題を挙げることなどの工夫が必要だと考える。事例の作成など教材についても検討を重ねていきたい。

文献

1）金子眞由美，鳩野みどり：成人看護学演習における学習意欲の変化とその要因．中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌，５，141-144，2009.

2）岩田すみ江，武分祥子，所澤好美：看護過程演習における評価と課題　成人看護学実習前演習の振り返り用紙の分析．飯田女子短期大学紀要，25，179-190，2008.

3）舟島なをみ：授業過程を評価する．舟島なをみ監修，看護実践・教育のための測定用具ファイル．医学書院，75-84，2008.

4）小野晴子，逸見英枝，金山弘代他：成人看護学実習における合同カンファレンスの評価 ― 実習施設間の学びの共有を通して ―．インターナショナル Nursing Care Research，9 (2)，141-148，2010.

5）真部昌子，武田美和，安藤幸枝：成人看護学演習に学生が自ら作成した紙上患者を導入して．看護教育，48 (9)，826-830，2007.

6）中山登志子：看護学実習カンファレンス教授活動自己評価尺度．舟島なをみ監修，看護実践・教育のための測定用具ファイル，医学書院，114.

7）小野晴子，逸見英枝，金山弘代他：成人看護学実習における合同カンファレンスの評価 ― 実習施設間の学びの共有を通して ―．インターナショナル Nursing Care Research，9 (2)，141-148，2010.

8）ロロ・メイ著（小野康弘訳）：不安の人間学．誠信書房，41,1977.

9）鈴木美和，亀岡智美，舟島なをみ：講義における教員と学生の授業過程評価の差異.看護展望，28 (5)，43-48，2003.

10）中谷啓子，舟島なをみ，杉森みど里：授業過程を評価する学生の視点に関する研究－講義．看護教育学研究，7 (1)，16-30，1998.

11）武田美和，安藤幸枝，真部昌子：成人看護学演習に学生が作成した患者の導入を試みて　患者像作成による学習効果．共立女子短期大学看護学科紀要，３，65-73，2008.

A study evaluating “adult nursing exercise” in adult nursing

Haruko ONO, Fusae HENMI, Ayumi NAKAYAMA, Hiroyo KANAYAMA, Junko KAKEYA, Hiroko TSUGENO

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

This study was designed to clarify points to be improved in the lesson of “adult nursing exercise” by students evaluating actual lessons, and to obtain suggestions to help promote future teaching activities and educational materials.

The goal of the “adult nursing exercise” in A junior college is to discuss various problems concerning adult patients and to specifically learn a wide range of nursing and problem-solving skills. The students take the initiative in clarifying case information, discuss the aid priority, and design a plan. The exercise aims for the learning to be useful in the development of processes in nursing practice.

The study method was: a questionnaire survey conducted after completing the above lesson, involving second-year students in the Faculty of Nursing of A junior college. As a result, the goal of the “adult nursing exercise” was generally achieved. The students highly evaluated the “degree of participation in the exercise” and its promotion of the “students’ knowledge and appreciation”. They unfavorably evaluated “sympathy with students’ feelings”, with the lowest evaluation being for “listening to opinions or ideas overcomes anxieties over the exercise”, indicating a strong anxiety over the exercise. The results suggested the importance of continuing the lesson of “adult nursing exercise” and necessity of lesson improvement to reduce anxieties over the exercise.

Key words: adult nursing exercise, lesson evaluation, nursing practice, development of nursing process